

西真寺通信

令和二年冬号発行 西真寺

住職のつぶやき

アメリカの大統領選挙の投票結果を巡り、バイデン候補とトランプ候補の支持者同士が対立し、アメリカにおける分断の歴史で最高級の爪痕を残しました。共和党と民主党支持者による分断は、トランプ大統領の誕生から火が付き、敗戦後も収束せず激しさを増しています。

加えて、SNS（ツイッター）でのフェイクニュースの拡散により、アメリカの分断を煽り、何が正しく何が正しくないのか、何が正義で何が悪なのかの二者選択を迫られています。

私は、アメリカの混乱した現

状に対し、傍観者の立場で笑うことはできないと感じます。

かつての日本の戦争が正義の為であると教え込まれ、戦争が罪悪であることに気づいたのは、いつだったのでしょうか。

第二次世界大戦中、当時十六歳であった渡辺清さんは、「これから陛下の為に国を守ります。もうこの命は自分のものではありません。陛下に捧げたものです」と誓い海軍に入隊しました。

渡辺さんは、艦隊武蔵の甲板で毎晩行われた壮絶なリンチを受けてもその屈辱に耐え、国を守り天皇陛下に尽くせば偉くなれる、そして必ず勝利すると信

じ戦後を迎えたのです。しかし、敗戦を迎えてまもなく、自分たちがその命をまともに戦ってきたマツカサーが、天皇と行儀よく並んでいた写真を見て啞然としたそうです。そして、天皇をかつての海戦の場所に引きずりおろして、そこに横たわっている戦友の無残な死骸を見せ、これがあなたの命令で始めた戦争の結果ですと耳元で叫んでやりたかったと回顧しています。

斎藤さんは、『再び裏切られた戦後』の中で、「正義のためだと教えこまれていた戦争が、実は無道な侵略戦争であり、他国へのあこぎな強盗行為であったのだと知ったのは敗戦になったからである。しかし、だからといって僕もその共犯者の一人であったことに変わりはない。（中略）ヤスパース（ドイツの

哲学者）も『戦争の罪』の中で言っているように、知らなかったことと、欺かれていた、ということとは責任の弁解になっても、責任そのものの解消にはならない。知らずに欺かれていたとすれば、そのように欺かれた自分自身に対してまず責任があるのではないかと述べています。一瞬にして正義が悪に転ずる戦争体験を通して、斎藤さんは自分の中にある真実に気づいたのです。

親鸞聖人は、「よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」『歎異抄』と申されました。真実に暗く（無明）、正義を生きようとする我らに対し、親鸞聖人は、真実に出遇うはたらきとして問いかけ続けていることを忘れてはなりません。「知らなかった」では済まされない問いだからです。

「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」³
—親鸞の神祇不拜から学ぶ戦争—

◆2. 本願寺教団と権力者

当時の本願寺教団は、法主制ほっすによる法主権には、「生害権」しょうがいけん

(破門権)と「後生御免」(仏法ごしょうごめんの為に死ねば浄土に往生できる) 〓 殉教) という宗教的権威と権力がありました。本願寺十世法主、証如しょうじょは内部対立を抑える為に、法主として指導強化を図ることに成功しました。いわば如来の代官が法主だったのです。

阿弥陀仏の救済権を、教団の法主が掌握した時代において、一向一揆はその戦闘能力を維持していたのです。親鸞聖人が説いた、弥陀と釈迦による二尊教

二尊教とは程遠い、法主による一尊教思想に変化していたことは否めないのです。

本願寺教団は、表向きは浄土真宗のみ教えで構え、中身は貴族化され、お上(権威化された)に姿を変えたのです。

存在感を増した本願寺教団は、軍事力と経済力を持つがゆえに、天下統一を目指す信長にとって、非常に邪魔な存在であったのです。

当時、本願寺教団の法主であり、権僧正ごんそうじょうに昇任した顕如けんじょ(注)

は、十代門跡の証如より十一代門跡を引き継ぎ、当時敵対していた勢力と友好関係を築き、本願寺教団を安定させました。しかし、信長から軍用金要求の度重なる圧力に耐えかねて、武田信玄や足利義明などと信長包囲

包囲網を組みましたが、結果的には朝廷の仲介わぼくで和睦(和解)しております。この時の

和睦派(三男じゅんによ・准如)は後の

西本願寺、

強硬派(長男きやうによ・教如)は後の

東本願寺

↓西真寺開祖は教如上人の弟子

この争いの背景には、仏教の教義云々よりも、教団による中央権力との関係性が大きく寄与しており、その後の東西本願寺に分裂した経緯を含め、宗教と教団あるいは、宗教教団と国家権力という関係が非常に重要になると考えられます。因みに親鸞は、「親鸞は弟子一人も持たずそうろう」の通り、宗教教団は形成しておらず、その考えもありませんでした。

ご存知の通り、親鸞聖人は権

力者との関係を持たない仏教者であったことは周知の事実であり、権力者が創作した歴史上では、実在しないとされたときまで言われた僧侶なのです。

この為、親鸞の「み教え」で対立した訳ではなく、国家権力が門徒の勢力を恐れ、教団に圧力をかけ対立したことは否定できません。また、教団を安定させる為に、法主制度を強化し、一尊教化思想に変化したことも、戦う教団の要因であったのです。(次号に続く)

注) 顕如は西本願寺第十一世

宗主しゅうしゅ、真宗大谷派第十一世門首

関白たねみち 九条植道ゆうしの猶子により門

跡(教如上人は近衛家このえと猶子関係による門跡) 武田信玄は顕如の義理の兄弟

死刑制度と悪を考える② 親鸞の悪の捉え方

1.

現代社会においては、「死刑になりたいから」という理由で殺人を犯しているケースも増え、死をも恐れない殺人者にとっては、抑止力との考えは当てはまりません。

厳罰化を望む死刑制度による抑止力では、殺人者を生む土壌や体質は変わらないのです。その国体質とは国家観に示されると考えられます。

社会学者のマックス・ウェバーは国家の定義について「暴力を合法的に独占するもの」と定義していますが、死刑は国内での最大の暴力であり、国外における最大の暴力が戦争です。遺族に死刑を希望させる社会や国家の在り方こそが、今こそ問われるべき根本問題であるのです。

殺人者を生み出す根本の原因は、国の制度である処刑により、虚しさとともに曖昧に終始されてゆくのです。

なぜ人を殺すような人間性が生まれたのか。殺人犯はどのような環境で育ち、どのような人からの影響を受けたのか。殺人者に成るために生まれてきた人間などは一人もいないはずで、殺人を犯した人を再度生み出さない国家の体質の改善は問われず、遺族の家族に対する心の援助も経済的援助も重視されない社会が延々と続くのが現状です。

次に被害者遺族の応報感情と報復権について考えてみましょう。

やられたらやり返すという権利は、紀元前ハンムラビ法典の「目には目を、歯には歯を」と同様に、復讐による殺人が国

で保証され、民意で支持された有効な考え方と言えます。しかし、この「かたき討ち」の権利は、日本において、武士だけの特権で日本の庶民が容認してきた文化ではありません。

応報感情の国家権力による利用は、アメリカによるパールハーバーの日本に対する恨みが原爆実験に利用されたように、戦争、人殺しを容易に肯定する報復感情、復讐心に加担する土壌を作るのは歴史明らかです。

自分の痛みや苦しみを相手にも与えてやりたいという主義主張は、「かたき討ち」に見られるような自分の気持ちを分かかってほしいという依存感情も潜んでいます。

精神科医、精神分析学者の土居建郎は、『「甘え」の構造』の中で、日本人が特異的にもつ依存感情として日本人の理論を考察しています。私たちには、絶

対に人を殺さない善人である人間であり続けようとする願望、執着心があるのかもしれない。そして恥の感情に敏感である我々は、武士のように悪を切り捨てる独善者として「悪」を忌み嫌う側に立脚し続けたのでしょうか。

我々は、「悪」である殺人者のこれまでの生い立ちや環境には関心が無く、殺人者が置かれた立場や状況を想像することすら拒みます。それは他人事として、被害者の遺族の恨みの感情だけを取り上げる立場であり、常に善人である賢者だからでしょうか。しかし、釈尊が言うように恨みで恨みを晴らすことはできません。

恨みは恨みで果たされ無いという道理は、加害者が死刑を執行された後における被害者の遺族感情に顕著に映し出されま

す。(次号に続く)

仏教の基礎講座

■念仏

インドの古代言語パーリ語でサティ（サンスクリット語…スムリテイ）とは、物事を集中して心に留めておくこと、日本語で「念」や「気づき」を意味します。また英語では、「マインドフルネス」として現代の瞑想法として使用されています。

仏教では、「心に固く思想の対象を保つこと」を意味し、心を集中させ、煩惱だらけの私が仏を憶念する重要な修行法の一つで、念仏三昧が有名です。

このことから鈴木大拙は、念仏の当初の目的は、仏陀の弟子たちが、仏陀がまだ生存するが如き感じを抱きたい為に「実相念仏」なり、後世になるに従って、永遠に極楽浄土に住する、

完全に理想化せられた仏陀を観る「観想念仏」となったと論じています。この「観想念仏」は、後に仏像を観ずる「観像念仏」に変化します。

一方で、仏を憶念することとが、転じて仏の名号である南無阿弥陀仏を呼ぶことになった訳です。鈴木はこの「称名念仏」の過程について、人間の自然な欲求であり、人間の発達の過程であると指摘しています。そして、念仏の目的を、我々凡夫が持つ、経験に積み重ねられた意識の根本にある「分別の心」を抹消することにあると論じています。

凡夫である私と、阿弥陀仏（法）とが一つに成る世界観が、お浄土に生まれることであり、その法に目覚め、信念するに至るのが念仏なのです。

シリーズ

親鸞聖人の言葉

●『経』に「聞」というのは、衆生、仏願の正起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり『教行信証』『信巻』

北畠知量によれば、「聞」には三つの次元があるといえます。先ず、故人の言葉を思う「聞」です。あの人は生前こんなことを言っていたけれど、今になってようやく分かったという次元です。これが衆生の「聞」です。

次に故人が仏に成っていたら今の自分に何を言うのだろうか、最初の「聞」より亡き人の言葉が深まり、きつと私をこんな風に思い言ってくれるだろうと創造する仏願の正起です。

そして、亡き人は諸仏となり

私を護り私を生かしてくれるはたらきとなった。有難い人生を送れたと感謝できる、仏の願い、法を頂ける「聞」に成るのが浄土真宗の修行であります。

亡くなられた光濟寺様の安富先生は「聞思」が真宗の根本（本末）であるとおっしゃったそうです。また、親鸞聖人は「聞思」して思慮することなかれ」と申されました。

世の中で起きている事象に対し、決して他人事として聞かず、私事として、如何に聞き、如何に深めて往くのが、思慮（分別）しない「聞思」に成るのではないのでしょうか。 合掌



浄土真宗本願寺派
信飯山西真寺

村上市寺町三の二十九

☎ 0254・52・3458